診療、看護、リハビリなど在宅介護の問題について、みんなで知恵を持ち寄り、発信します。板橋から… 購読料：無料

在宅介護を支えあう地域情報紙

おとなりさん

隔月刊 第30号

Care Support Network

ケアサポートネットワーク新聞部
〒173-0013 東京都板橋区氷川町1-16 氷川ビル6階
Tel. 03-5944-7321 Fax. 03-5944-7320
発行責任者 島田 潔
http:// www.hat.hi-ho.ne.jp/maika/Otonari/otoindex.htm

「ケアサポートネットワーク」（CSN）は、在宅介護を支援するため医師、看護師、社会福祉士、施設職員、ホームヘルパーなどで構成する「心の第三セクター」です。

特集 どんな人も、尊厳を持って人生の終わりを迎えてほしい

路上生活者のホスピスケア施設「きぼうのいえ」

長引く不況の中で家や職を失い、ホームレスになる人が増えています。とりわけ高齢者の場合は病気をかかえている人も多く、飢えや暑さ、寒さに苦しめられ、人知れず孤独の中で死んでいく人が少なくありません。今回の特集では、こうした人たちの最期の日々を新しい家族として見守り、人間らしく過ごしてもらおうと努力するホスピスケア施設「きぼうのいえ」を訪ねました。

行き場のない人たちに充実した最期の時を

皆さんは、「山谷」という地名にどんな印象を持たれるでしょうか。ホームレス、ドヤと呼ばれる簡易宿泊所…。山谷暴動と呼ばれた反権力闘争があったことを思い出す人もいるでしょう。戦後すぐから山谷は単身の日雇い労働者が多く集まる「労働者の街」として知られていました。建設ラッシュに沸くバブルの時代には、一万五千人もの労働者が暮らしたといいます。

「きぼうのいえ」の外観

しかし、景気の低迷が続く中、この街もご多分にもれず高齢化の波が押し寄せており、仕事も住む家も身寄りもない人たちが、孤独のうちにひっそりと死を迎えるケースが増えています。入院するほどではないと病院を追われ、といえ自力で生活することもできず、どこにも行き場のない人たちが、この街には今でも大勢いるのです。

昨年十月、こうした行き場を失った人たち、家なき人たちのためのホスピスケア施設、「きぼうのいえ」が南千住にオープンしました。代表理事を務める山本雅基さん（三十九歳）が、看護師でもある妻の美恵さんと二人で一億一五〇〇万円の資金を借り入れ、一一〇平方メートルの土地に四・七畳の個室二十一を備えた四階建てのケア施設を作り上げたのです。

各室にはベッド、冷蔵庫、テレビ、衣装ケースなどが備えられ、冷暖房やナースコールの設備も完備。快適で、いかにも居心地がよさそうです。ほかに食堂や談話室、浴室、診察室なども設けられており、山本さん夫妻を中心としたボランティアスタッフが入所者のケアを行っています。

居心地よさそうな個室

入所者の受け入れは福祉事務所の要請により行われていますが、多くはがん、脳梗塞、糖尿病などで末期と診断され、ホスピスケアが必要と判断された人たちだそうです。スタッフはその人たちの家族となって、人生の最期をできるだけよい環境で迎えてもらおうと努力しています。

「心がけているのは、入所者の方たちのこれまでの生活様式をできるだけ尊重し、プライバシーを守ること。ですから、ここにはこまごまとした日常の規則はありません」と、山本さん。

「きぼうのいえ」の一日は、朝六時半、スタッフの朝食準備から始まります。八時には各部屋に声をかけ、動ける人は食堂で食事をとってもらいます。その間にスタッフは各部屋のシーツ交換（毎日）や掃除、洗濯などを行い、通院が必要な入所者に付き添ったり、往診ドクターを受け入れたりしています。

入所者の外出は自由で、なかには小遣いでパチンコに出かける人もいるそうです。反対に玄関で外を眺めながら一日を過ごす人もいるなど、時間の過ごし方はまったく自由。入浴は家庭用のバスに二人ずつ湯を入れ替えて入ってもらっており、入所者は心置きなく汗が流せます。訪問看護師やホームヘルパーが派遣されている人もいますが、施設が集合住宅形式なので、こうした介護サービスを効率よく利用できるという利点もあるそうです。

代表理事の山本雅基さん

将来は事業として成り立たせたい

現在、施設の医師は、ホスピス医（ホームケアクリニック川越・川越院長）と週に一度のかかりつけ医、アドバイザー的なボランティア医の三人体制。スタッフは山本さん夫妻を含めて二十人で、年代は二十代から五十代までと幅広く、全員ボランティアです。

山本さんの自宅は「きぼうのいえ」の敷地内にあり、ふだんは職住接近で施設の運営にあたっていますが、日曜日だけはほかのボランティアに任せ、仕事から離れたプライベートな時間をとるよう心がけているそうです。

山本さんは上智大学の神学部を卒業した敬虔なクリスチャン。これまでも難病の児童と家族のための宿泊施設「ファミリーハウス」運営委員会の専従事務局長を務めるなど、さまざまなボランティア活動を行ってきました。「きぼうのいえ」も「やむにやまれぬ気持ち」で始めたと言います。

「子供のころ、捨てられた子猫が雨の中で凍えているのがかわいそうで、連れ帰って叱られた経験、誰にでもあるんじゃないでしょうか。そんな優しい気持ちを人は本来持っていると思うんです。私もたまたま、家も職も身寄りもないまま孤独のうちに死んでいくお年寄りを目の前にして、放っておくことができなかったということです」

しかし、個人の善意だけでは、こうした施設の運営はできません。入所者に支給される生活保護費や障害者手当ての中から食費や光熱費を負担してもらうなどしても、現在は毎月百万円以上の赤字が出ており、不足分は寄付に頼らざるをえないと言います。

「でも、行政の支援が得られれば、将来は十分、事業として成り立つと思うんですよ。そうなれば、ほかでも同じような施設を作る人が出てくるでしょうし、私ももっとこの施設を拡張していきたい。全国にこういう施設がどんどんできて相互に交流できれば、多くのお年寄りが『意義ある人生だった』と、おだやかに最期の時を過ごせると思うのですが」

「きぼうのいえ」を開設して以来これまでに、がんや肝硬変で四人の方が亡くなりました。全員が病名や病状を知ってこの施設で最期の時を過ごすことを希望して入所してきた人たちで、おだやかな日々の中で静かに臨終を迎えたそうです。こうした看取りの体験を通じて「自らの存在感、死に対する虚無感」へのケアが大切であることを改めて認識したという山本さん。今日も、一人でも多くのお年寄りに手を差し伸べたいと、奮闘する毎日です。（安田）

食事どきはにぎやかな食堂

■「きぼうのいえ」にご支援を

「きぼうのいえ」は、施設の建設費約一億円を銀行から借り入れて建てられました。その返却のため、ただいま広く善意の寄付を募っています。どうぞ皆さんのご支援をお寄せください。送り先は以下のとおりです。

【郵便振替】
00130-3-664844
「山谷・すみだリバーサイド支援機構」

【銀行振込】
みずほ銀行本所支店普通口座1796118「山谷・すみだリバーサイド支援機構」

【お問い合わせ】
東京都台東区清川二丁目二十九番十二号／☎〇三・三八七五・七五二三／FAX〇三・三八七五・七五二五
E-mail kibounoie@aol.com

★取材協力／山本雅基　撮影／安田　力